

## 待降節第4主日（クリスマス礼拝） 説教 「主イエスとの出会い」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2020年12月20日

### イザヤ書 7:10~14、マタイによる福音書 1:18~23

クリスマスおめでとうございます。アドヴェントクランツの4本目の口ソクに火が灯され、待降節第4主日を迎え、今年もクリスマス礼拝を共に献げることが許されました。ただ、クリスマスは正しくは今日ではなく25日です。つまり、あと5日、待たねばならないということですが、けれども、多くの教会はクリスマスを祝うべくこの日に礼拝を捧げています。そのため、少し気が早いのはと言われることもあります。ただ、そう言われることは正しいことでもあるのです。しかし、私たちを含めて多くの教会は、今日、一足早くクリスマスをお祝いするのです。それは、私たちの気が早いからでもなく、また、その理解が間違っているからでもありません。もちろん、開き直ったことでもありません。イエス様の降誕を祝うためには、いずれの主の日がふさわしいのか。それは、クリスマスの前か、それとも後か、そして、そこには、恐らく、私たち日本人の時間感覚、共同体感覚が大きく影響しているようにも思いますが、ただ、いずれにせよ、多くの教会は、クリスマス直前の主日をクリスマス礼拝としてお祝いしてきたわけですから、そこに私たちはそれぞれの教会のあり方、その歩みを見ることが出来るわけですが、つまりは、私たちはそういうやり方を長く続けてきたということです。ですから、あれこれと理屈づけるのではなく、今までそうしてきたから、ということに十分だと私は思うのです。つまり、親や祖父母が食べてきたことを私たちも同じように子や孫と一緒に食べるということです。ただし、それは、だから、そのことを盾に取って、いつまでも同じように同じものを食べ続けなければならないということではありません。なぜなら、今までそうしてきたから、ということとは、何も考えないことではないからです。

クリスマスとは、イザヤが預言した「インマヌエル、主我らと共にいます」ことの実現を共々にお祝いすることでもあります。イザヤが預言してから事が成るまでがおよそ700年、そして、事が成ってからこの時までがおよそ二千年、そこで何が大事なのかということ、インマヌエルと呼ばれる主はの看板には偽りがないということ。事が成り、主我ら

と共にいますことを私たちがこれまでもずっとお祝いし続けてきたのはそれゆえのことであるからです。ところが、このコロナ禍にあって、私たちがこれまで当たり前のようにやり続けてきたことができないために、私たちはどこか浮き足だったりもしているのです。かくいう私もその一人ではありますが、なぜなら、皆さんに向かって、口ではあれこれ言いつつも、昨日もそうでした。シーンと静まりかえった会堂で、クリスマスの前日を一人過ごしていることに耐えられない気持ちになったからです。それは、クリスマス翌日に控えた皆さんの弾む声、神様に豊かな礼拝を捧げるべく最後の準備をする聖歌隊、奏楽者の賑々しさなど、そうした皆さんのクリスマスを迎える上で息遣いに困まれ、牧師は毎年クリスマス前日を過ごしているからです。ところが、今年は、そうした息遣いが感じようにもまったく感じられなかったわけです。コロナに感染した際の症状の一つとして、味覚が感じられないということがあるそうですが、ですから、コロナ禍は、そういう意味でも私たちの感覚を鈍くさせ、また、様々なものを奪うものでもあるのでしょうか。

このように、あれもこれもすべてない、ないないづくしで迎えるしかなかったのが今年のクリスマスでもあります。しかし、だから、まったく何もできなかったというところはありません。一時閉じていた礼拝は再開され、祭りを迎えた時のあの高揚感はなくとも、ツリーの飾り付けやアドヴェントクランツはいつも通り整えられ、こうしてクリスマス礼拝を献げることが許されました。ですから、これはありきたりな言葉ではありませんが、できないことを悲しむのではなく、できることを喜ぼうと、牧師であれば、そういつて皆さんを励まし、次のために備えるべきであろうと思うのです。ただ、クリスマスを祝う上で御言葉が語ることは、来年に備え、次はこうしよう、ああしよう、こうせねば、ということではありません。みどり子の誕生を祝う私たちに、もう一度、そもそものところで御子の誕生を祝うということがどうということかを教えるのです。それが、インマヌエル、主我らと共にいますということですが、イザヤが預言したこの救い

の出来事を神様は御子イエス様の誕生を持って実現くださったわけですから、私たちがこの救いの出来事を我がこととして知ることができるのは、この出来事を迎え入れ、喜び祝い続けていた人々がいたからです。そして、その始まりがこの若い夫婦であるということです。

コロナ禍の中にあって、ないないづくしのクリスマスは実に味気ないものではありますが、けれども、この二人の若い夫婦の上に訪れた出来事も実に味気ないものでありました。そうである以上、この味気なさこそ、クリスマスを祝う上での原点があるということです。ただ、そこで私たちは思うのです。御子の誕生の出来事は神様の小さな親切以外の何ものでもない。また、それだけではありませぬ。御言葉は、母マリアの夫ヨセフのことを「正しい人であった」と語るのですが、この若い夫婦の上にこの特別な出来事が訪れたのは、まさにこの「正しさ」ゆえのことでもありました。そして、それは、その正しさの裏側にあるものを見つめてのことでもありますが、なぜなら、人が求め、手にしたいと願う正しさには、その心の裏側にあるものを隠そうとする意図が働きもするからです。そして、それは正しさを盾に我が身を守ろうと卑しさであります。ただ、ヨセフの場合は、少し事情が違って中途半端な正しさを主張する人ではありません。その正しさには、確かに御心を拒む弱さが潜んではいましたが、けれども、穏便に事をすまそうとするところは、その優しい一面が現されてもいたようにも思うからです。ですから、そういう意味で、ヨセフ以上の「正しい」者は多くはありません。そうである以上、選ばれるにふさわしい者はこの夫婦を置いて他にはいなかったということです。ですから、神様はやはり見る目があるし、その判断も間違っていないということでもありますが、けれども、この二人にとっては、やはり迷惑な話でもあったでしょう。ですから、この二人の若い夫婦の下に訪れた出来事を私たちは奇蹟、奇蹟とはやし立てたりもするのですが、もしもそれが我が身に起こったとしたらどうでしょう。また、そもそものところ而言えば、クリスマスを私たちがお祝いするということは、この若い夫婦のように御子を迎え入れるということです。では、その時、私たちは、祭りの時のような高揚感に包まれるのでしょうか。それとも、暗澹たる気持ちにさせら

れるのでしょうか。このように、御子を迎え、私たちがクリスマスを祝うことの原点には、人としての弱さであり、愚かさであり、さらには、それゆえの悲惨さを見ることもできているのです。けれども、それを言い訳としていただけでは、何も始まることもありません。この二人のよう、そこから一歩を踏み出すことが求められているのです。

そこで、私の場合、あれこれと想像したりもするのです。幼子イエスは、どんな様子でその母の胸に抱かれていたのだろうか。おっぱいをお腹一杯飲んだのだろうか。少し大きくなったときには、はいはいしたり、キャッキヤと笑ったり、周りの者を和ませたりしたのだろうか。また、母マリアは、そういうイエス様に頼りたり、その頬にキスをしたりしたのだろうか。さらには、父ヨセフは、そういう母と子をどのような気持ちで毎日接し続けたのだろうか。イエス様から初めて「お父さん、父ちゃん」と呼ばれたとき、どんな気持ちであったのだろうか。イエス様を迎えてからのその暮らしぶりといったものをつい想像したりしてしまうのですが、それは、クリスマスの祝いも、私たちの信仰も、このヨセフとマリアがそうであるように、日々のその暮らしの中で始まったものだからです。それゆえ、そこには幸せな時間と複雑な現実とが混在していたことなのでしょう。また、その時代時代における様々な問題がその中で現れ出ることにもなったのでしょうか。つまりは、クリスマスの出来事は、私たちから見て遠い世界のことではないということです。この若い夫婦のように、御子イエス様をこの手で抱き上げることであり、つまりは、イエス様と共に暮らすこと、それゆえ、それはさほど難しいことではないということです。それは、皆さんと同じように、誰もが同じことをやっていることだからです。

しかし、この度のコロナ禍が教えることはその気があっても、そのやる気が削がれることが現にあり、そして、信仰を持ってしても、削がれたやる気をもう一度奮い立たせることはなかなか簡単ではないということです。そこで、考えたいことは、インマヌエル、主我らと共にいますと言うことです。ただ、世間、世俗の人々の間には、もしかしたら、私たちの中でも、信仰というところか浮世離れたものとの固定観念があるようにも思うのです。けれども、「インマヌエル、主我らと共にいます」ことを伝える福音

を信じるということとは、浮世離れしたもののなんでしょうか。この日の御言葉が語るように、私たちが生きるこの浮き世は、同時に憂き世でもあるのですが、ただ、それがウキウキしたものであっても、また、憂い多きものであっても、いずれにせよ、この世俗の中で経験しうるものがインマヌエルの出来事でもあるのです。だからこそ、福音は福音としての異彩を放つのですが。ただ、やる気が削がれたときに触れる福音は、ちょうど今がそうだと思いますが、どこか味気ないものでもあるのです。それは、世俗に生きる私たちの気持ちを高ぶらせる場所がないからです。しかし、その私たちが世俗的クリスマスを馬鹿にするのはどうしてなのでしょう。それは、やる気を出そうが出すまいが、私たちが福音というものを誤解しているからなのではないでしょうか。

福音は、ヨセフ、マリアという世俗に生きる人々に届けられたものであり、つまり、この世にどっぷりつきつて生きる私たちだからこそのものであるということなのです。ですから、世間を笑う前に、私たちは、自分が一番世俗であることを知らなければなりません。それは、私たちの弱さや愚かさや、それゆえに避けることのできない、世に生きる私たちの悲惨さなど、私たちの生きる現実そのものに働きかけるものが福音であるからです。それゆえ、やる気があるかないかは二の次三の次のことです。私たちは、ヨセフ、マリアのように主を迎え入れて、その私たちの悲惨な現実の中で堂々と救いを求めてもいいのです。ただ、詩編130編に「深き淵の底から、主よ、あなたを呼びます」とあるように、そのためには、自分が辛く苦しいことを、つまり、自分が深き淵にあることに目をつぶってはなりません。なぜなら、この若い夫婦にとって、イエス様を迎えての現実には、まさに深き淵に沈み込むようなものであり、けれども、イエス様は、そこに間違いなく共にいてくださっているからです。

ですから、クリスマスを祝うということとは、この世に生きる私たちが深い淵の中から主イエスの御名を呼ぶことであらう。もし呼ぶことがなければ、生まれかみどりごを私たちの中に迎え入れることはできません。そして、若い夫婦の新たな日々がそこから始まっていったように、私たちもまたそこから新たに生き始めることになるのです。そのためには、イエス様の御名を私たちが呼び、迎えな

ければなりません。ですから、そういう意味で、クリスマス直前の主日にクリスマスを覚え、礼拝を献げることは、新しい明日へと続くためには正しいことではない。なぜなら、まだ終わってはいないし、それゆえ、次へと続いて行く。しかも、主の日の礼拝を私たちがこうして捧げるといふことは、私たちが主にあって新たにされる経験をしたということではない。ただだから、ホッと終わるのではなく、まだ終わらぬところから次に続いていく、主我ら共にいます。信仰は、この次に続いていくところに大きな意味を置くものなのです。

ただ、先ほど、やる気は二の次三の次と申しましたように、そのために私たちが何かをしななければならないということではありません。そこで、誤解されていられる方も多いため、これは確認のために申し上げますが、私たちの信仰は、なにかをするとか、できないとか、そういうところで問われるものではありません。知の巨人と言われたある神学者が、クリスマスを祝うと言ふことは休むことであり、労苦から離れることであると語るのであるが、それは、あらゆる人間が休むことから逃れようとしているからで、そして、それは、自分からも、また、他のことからも逃れようとしているからで、そこで生じるこの苦勞は、休むことを拒む、罪ある自分自身から逃れようとしてのものであるのです。それゆえ、休むことを拒むようなクリスマスの祝い方はそもそもそのころでふさわしくありません。ですから、コロナ禍の今、もし、私たちが落ち着きを失っているとしたら、それは、クリスマスを誤解しているからなのではないでしょうか。

ただ、このように申しますと、この人は大丈夫、あの人は大丈夫というということを出す人が必ずおりますが、大丈夫だと決めるのは私たちではありません。クリスマスを祝うと言ふことの中には、誰にとっても必ず満たされないものが残されているのであり、それをしっかりと見つめつつ、なお、その上で、ということが、クリスマスを祝うということだからです。ですから、自分は大丈夫だと決めつけ、そう思い込ませたとしても、ちょうど、ヨセフがそうであるように、それで私たちは落ち着き払うことなどできません。だから、あれこれと動き回り、負わなくともいい苦勞までも負ってしまわなければならないものがあることを知って、じっとしているのは悪いことでは

ないと知らされるわけです。そして、それを知らしめるのが天よりの声でもありませんが、ですから、それがその胸に届くためには、私たちはじっとしているしかありません。知の巨人は、それをクリスマスを祝うことだと言っているのです。それはまた、ある古代教父が言っているように、人は天に帰るまで安きを得ることはないからです。それは、私たちが罪ある自分自身から逃れることで平安を得たいと願うからでもあります。つまりは、そういう都合の良さを私たちが持っているということです。

そして、このことはまた、私たちが自身が愛を持っていないということでもありますが、私たちが愛そうとして愛せないのはどこか誤魔化しがあるからです。だから、そういう自分を誤魔化そうとしたら、愛せないのに愛しているふりをしたりもするのです。そして、このことはつまり、私たちが愛せない自分から逃げているということでもあります。つまりは、御言葉が「神は愛だ」と語る神から逃げているということ、愛せないのは、神に憩うてはいないからです。けれども、イエス様は違います。母マリアに抱かれています。イエス様の姿は神に憩うてあり、悲惨極まりない若い夫婦のその腕に抱かれています。それがみどりごキリストでもあるのです。そして、それがクリスマスを祝う私たちの姿であり、それゆえ、もし私たちがこの時落ち着きを失っているとしたら、それは、イエス様を信じて自分自身からも、神様からも逃げ出して、そこに憩うてはいないからです。まただから、慌てふためき、焦り、落ち着きを失い、挙げ句の果てには、深い淵より這い出すために何でもしようとするのです。ですから、ヨセフの正しさには、そういう私たちの弱さが現れているようにも思いますし、まただから、神の現実を穏便に回避しようとしたのでしよう。それゆえ、そうした態度は、人間のこざかしさを正しさで塗り固めようとするに等しいことだとも言えるのでしよう。それが、それゆえにまた、正しさを求める人間臭さは、同時に罪の現れともなるのです。まただから、人は罪から逃れようとして正しさを振りかざしたりもするのですが、ただ、それで私たちが向かうところは、神のいますところではなく、神がいますところとは正反対の方向です。では、神に方に向かうとはどういうことなのか。それが、幼子のごとくということでもあるのです。

知の巨人が語った休むということとは幼子のごとくと言ふこととです。神の子イエス様が罪の現実にある若夫婦に抱かれていたように、今ここに委ね休むということと、つまり、何かをしようとするのではなく、ただそこにいるということとです。それは、待つということとは「いる」ということとあり、それゆえ、クリスマスの祝いの時は、この委ねたところに約束されてもいるのです。ただ、そこには人の気を引く素晴らしいものはありません。そこは、御旨が実現したなど誰も信じておこなうことができない、人の目から見れば、悲惨きわまりないところなのです。しかし、そこにキリストは共にいまし、まただから、そこに私たちは休むことができるのです。それは、そこが私たちの休むべき場所であることを知っているからです。だから、そこで私たちは安心して叫ぶことができるし、安心して嘆き悲しむこともできるのです。そして、それは、私たちがいつまでも叫び、嘆き悲しみ続ける者でないことを知っているからです。

私たちは神様から逃れようとする罪深いものです。この事実を私たちは誤魔化すことはできません。私たちが崇高な者から逃れようとするのはそれゆえのことでもあるのでしょうか。けれども、深き淵にたたずむしかない私たちのところに、主は降りてくださいました。そして、それが神様の御心でもあるのです。若い夫婦に抱かれたキリストはそのことを現しています。だから、私たちはそこで喜んでいいし、また、神様助けてくださいと叫んでもいいのです。そして、それが私たちが生きる世俗、この世であるということとです。ですから、今までがこうだから、今もこうだと決めつけるのでもなく、また、今までがこうでなかったから、これからはこうせねばと思ひ込むのでもなく、神様とイエス様が共にいまし、そこに自分もいる、何かをして、何かを創り上げようとするこざかしさ、小さな箱庭を頑なに守り続けようとするあざとさ、そういうところに自分を置くのではなく、ただ神様とイエス様が共にいまし、祈りましょう。